荒淫の館（上巻）

※体験版※

「あぁぁああっ！熱い、あああぁぁあ！あ、あああ――――――！」

炭治郎の身体が何度も跳ね、断続的に雛先から白液が弾け飛ぶ。
吸盤状の触手が先端に口を付け、離すたびに白液が吐き出され、射精絶頂の連続を否応なく味わわされる。
身体の中に植え込まれた淫蟲が活発に動いて、炭治郎の身体から精を途切れさせないように作用している。
淫蟲のせいで胎内は女の愛液のように濡れ、容赦なく突き上げてくる疣触手が、意識が明滅するほどの激悦に持ち上げながら、炭治郎の中を味わい尽くしている。

「はあ、はあ、はあ、あぁぁぁあ・・・・っ！」

絶頂のさらに上をいく極絶頂が訪れ、炭治郎が触手を締め付けると、悦んで触手は炭治郎の中に粘液を水道のように大量に注ぎ込む。

「あぁぁぁああ――――――！」

胎が膨らみそうなほどの大量の淫液を注がれ、その熱さで炭治郎がまた絶頂を迎える。

疣触手が引き抜かれると、秘孔から注ぎ込まれた淫液がどろどろと流れてゆく。その色は白く、男の精液を連想させる。

「はっ・・・はっ・・・あぁ・・・あ・・・ああ・・・」

炭治郎が気を失いかけると、極細の触手が一本洞内に挿り込んでくる。中の精液を掻き出すように抽挿するが、それだけでも絶頂に近い快感が押し寄せてくる。極細触手は天井から無数に伸び、次々と炭治郎の秘孔へと挿ってゆく。

「あっ！あっ！あぁああっぁあっ！やめええ！」

一本一本は細いが、それらが胎内に挿って、それぞれが中で暴れ狂い、炭治郎の身体を悶絶させた。何度も絶頂を繰り返して鋭敏になった胎内を、鞭のように叩かれたり中の襞を引っ掻き回されたり、ぐるぐると舐め回され、あらゆる感覚で炭治郎を翻弄する。

「・・・・・・っ！」

あまりの激感に炭治郎が背を反らせると、舌触手が背のくぼみを撫で上げ、ゾクゾクと愉悦があがり、口の端から唾液が零れてしまう。
チュブチュブと淫音を立てて炭治郎を責め、秘孔から白液を吐き出させるが、すでに十数本となった極細触手のせいで胎の中の絶頂がいつまでたっても止まらない。

「あぁぁあっ！あっ――――――！」

気を失いたくても激感ですぐに目覚めさせられ、延々と淫責めを受けさせられてしまう。感じたくないのに、気持ちよさが嫌悪を塗り潰し、炭治郎を追い込んでゆく。
一体この饗宴はいつになったら終わるのだろうか。炭治郎は理性を快楽で削られながら、美しい裸体を激しく身悶えさせて、一方的に与えられる愉悦を感じるままだった。

※※※

褒められて少し気が緩んでしまったが、炭治郎はすぐに我に返って気を引き締めると、ホールのあたりを見回した。

（この臭い・・・！）

大階段の後ろから、確実に鬼の臭いがする。
炭治郎は素早く抜刀し、正眼に構えて臭いの方向を睨みつける。

「そこの鬼！姿を表せ！」

この洋館は暗い。日光が一向に入ってこない密閉空間なので、鬼は自由に移動することができるのだろう。
突然の鬼の遭遇に炭治郎は身体を緊張させ、刀の切っ先を見つめ続ける。

「そっちじゃねえ、こっちだよ」

炭治郎の右から若い男の声がして、炭治郎は弾かれるようにそちらへ身体を向けた。
すると暗闇となった廊下の向こうから飛び道具が放たれた。
炭治郎は身を捩じってよけ、武器が廊下に刺さる。苦無だった。三本の苦無が突き刺さっている。

「ひえ、助けてくれ！」

炭治郎の背後で多野の金切り声があがったが、炭治郎はすぐに不信感に囚われる。とっさに嘘の臭いがしたからだ。
また闇から苦無が飛んでくる。しかし今度は身を躱さず、炭治郎は背後の多野を庇って日輪刀で跳ね飛ばそうとした。
しかし、三つ投げられたうちの二つは弾けた。だが、最後の一本、それは刀の中をすっと通り抜け、炭治郎の胸元に刺さる。

「あっ・・・！」

不思議と痛みはなかったが、代わりに燃え上がるような熱さが、胸元を中心に身体全体へ広がって行った。
苦無が刺さった部分には大人の掌ほどの大きさをした三重の光る同心円が生じる。

光はすぐに消えたが、炭治郎は鬼の不可思議な苦無を食らってしまったことに、顔から血の気を引かせていた。

「かかったな。血鬼術、『触縛』！」

鬼が叫ぶと、どころからともなく左右から綱が伸び、炭治郎の両手に巻き付いて右手は左に、左手は右手に交差するように引っ張られ、両足にも左右から綱が絡んで、こちらは左右に大きく開かれてしまう。

「うっぐ・・・！」

そのまま空中に持ち上げられ、炭治郎は足場も奪われてしまった。
なんとか綱を引き千切ろうと炭治郎は力を籠めるが、綱はひどくぬるついていて、いくら力を込めても滑るばかりで力が空回りするばかりだ。

（日輪刀だけは、落さない・・・！）

右手に握った刀を必死に掴むが、特に右手への締め付けが強くて腕が震えてしまう。

「爺さん、もういいぜ。相変わらず下手な演技だな」

廊下の暗闇から、苦無を投げてきた鬼が姿を現す。上背のあるスラリとした体躯で、袖のない茶色の着流しを纏っている。癖のない長い黒髪を揺らし、顔は非常に整っているが、目の下に三角を縦に三つ並べた刺青が入っているものの、それが妙に艶めかしく、この鬼の美貌を全く損なっていない。

「ふん、てっきり水の美剣士がくると思ったが、こんな小僧をよこすとは・・・鬼殺隊も人手が足りぬようだな」

炭治郎の背後で悲鳴を上げて見せた老人は、先ほどの柔らかな物腰とは打って変わって、低い声で言い放った。苦無を受ける直前、嗅いだ香りには間違いはなかった。
多野は自分を囮に使って炭治郎の動きを止めさせ、鬼に血鬼術を掛ける手助けをさせた。

「お前たち、結託してるのか！」

ギリギリと身体を締め上げられながら、苦痛で炭治郎の顔が歪む。

「まあな。鬼の俺が棲むには、この日の当たらない屋敷がちょうどいい。そこの変態ジジイも俺の術で邪魔なヤツやら目をかけたヤツやらをひっ捕らえるのに俺の術が都合いいから、居させてくれるんだ」

炭治郎は首をなんとか巡らせて、多野を叫びつけた。

「あなたは鬼の恐ろしさを知らない！鬼は人を食べる！共存なんて考えちゃいけない！早く目を覚ましてこの鬼を倒してください！陽の光が当たると、滅びます！」

すると多野は炭治郎に歩み寄り、その赤毛を掴んで引っ張った。

「いっ・・・！」

「ふん、そんなことなど知っておるわい。赤い髪に赫い瞳・・・珍しいが、わし好みではないな。可愛い顔立ちだが、あと十年たってから出直して来い」

そう言うと、炭治郎の髪を勢いをつけて手放した。

（この人は鬼に洗脳されてるんじゃないのか？それどころか鬼を利用している？そんな馬鹿な！）

初めて出会う関係性に戸惑いながら、炭治郎は今度は鬼を睨みつける。

「この人に何を吹き込んだのか知らないが、俺を殺したら次の鬼殺隊がやってきて、結局お前は退治されるぞ！人間を惑わせて自分の居場所にするなんて」

「だから惑わせてねえっての、わかれ」

そう言うと、鬼は同じ目線にまで吊り上げられた炭治郎と目を合わせ、その顔を近づける。

「あの爺さんのお好みには合わなかったようだが、お前は頑固で純朴そうだからそそる。俺が可愛がってやるよ」

そう言うと、鬼は指を一つ鳴らした。

炭治郎を引っ張っている、ぬるつく綱――――触手がさらに引っ張られ、炭治郎の身体がミシミシと音を立てる。

「うあああああっ！」

痛みに耐えられず、炭治郎は右手から日輪刀を落してしまった。

（しまった、日輪刀が・・・！）

「ほんとしぶとかったな。とっとと離せばいいってのに」

鬼は刀の柄を蹴って遠くまで飛ばし、炭治郎に向き合った。
両手を交差した格好で拘束され、両足は股関節が抜けそうなほどに、強く左右に引っ張られている。
炭治郎が胴体を暴れさせても、身体が宙に浮いているので功を成さない。
鬼の美貌が炭治郎に近づき、目線を合わせると、怪しく笑って言った。

「まあ、まずはこれからかな？」

炭治郎の目の前で、鬼は舌を出した。しかしその舌は尋常ではなく、蛇のように長くするすると伸び、先端がこよりのように細く狭まってゆく。

「な、何をする気だ！俺は何をされても絶対に屈しないぞ！」

「そう言って、ベラベラ吐くようになったヤツを何人も見てきた」

呆れたように鬼は言い、その舌の先端を炭治郎の耳に突き立てる。

「うあああっ！」

予想外の攻撃に炭治郎は叫んだ。
炭治郎に近づいた極細の舌は、外耳を通り、鼓膜の下にある内耳を通過する。
その直後、炭治郎は頭の中を直接掻き回される感覚に打ちのめされた。
まるで脳を直接舐められているかのような絶対的快感を感じ、耳の中をずるずると舐められている間、その極悦と言える未知の快感が延々と続く。
一瞬味わっただけで脳が蕩けそうな愉悦が連続して続けられ、頭が真っ白になって、脳天がおぞましいほどの快楽で痺れ、それが全身に伝播してゆく。
これまで味わったことがないほどの強烈な激感に、炭治郎は叫び声をあげ、全身を激しく痙攣させた。

「あああああっ！ああっ！あぁぁあ――――――！」

しかしすぐに叫ぶ声は途切れ、炭治郎の身体全体が小刻みに震え、瞳はぐるんと回ってほとんど白目になり、口からは涎を垂らしている。
鬼の舌が耳から抜け出し、さっきとは打って変わった炭治郎の様子を見て笑みを深めた。

「あっ・・・は・・・・あぁ・・・」

未だに痙攣している炭治郎を満足そうに見ながら、鬼は左右に開かれた両足の間の真ん中を触り始めた。

「普通はこれで小便を漏らす・・・ありゃ、お前漏らしてねえのか。ふーん・・・」

興味をそそられたようで、鬼は炭治郎の腰から下の衣服を苦無を使って切り刻み、下帯を付けただけの下半身を晒す。

「お前はこっちか・・・おぼこい顔しやがって、身体は調教済みかよ」

鬼が下帯に爪をかけて破り、廊下に落下させると、べと、と白い布は白液を零しながら廊下に広がった。
未だに耳からの絶悦に震えている炭治郎に笑いかけ、鬼は人差し指を突き出すと、そこを巨大なナメクジのように変形させ、長さも指の倍ほどに伸ばしてゆく。

下帯を取られ、完全に裸にされた炭治郎の綺麗な下半身の中心に、長い舌をべロリと這わせると、炭治郎が、ひっ、と反射的に怯えの声を上げて震えを止めた。

「さあ、お前の胎の中はどれだけ調教されているのかな？」

粘液を纏った鬼の指先は、小さく窄まった炭治郎の秘孔に押し付けられた。拘束された下半身が小さく跳ね上がったが、抵抗は一切削がれてしまっている。
そのまま鬼は指を突き挿れて、炭治郎を指で犯し始めた。
その途端、炭治郎の目がぐるんと回って正気に返り、胎の中をゆっくりと侵入してくる異物に悲鳴をあげた。

「や、やめろ！なにするんだ！ああっ！あっ！ぐっ・・・！ぁぁああっ！」

「善がってるじゃねえか・・・純粋そうなツラしやがって、悪い子だなあ・・・」

鬼は炭治郎の後ろを犯しながら、目の前にある雛先にも目を付ける。耳を犯した舌と、口の奥からもう一枚舌が現れ、反応している雛先を上下に舐め回し、炭治郎がそのたびに腰を揺らして苦悶の声をあげる。

「ううっ・・・！こ、こんな、許さないっ・・・！」

しかし鬼の舌は巧みだった。二枚の舌で炭治郎の雛先をびちゃびちゃと愛撫し続け、炭治郎はその甘い感覚に無意識で背中を震わせてしまう。
一枚が裏筋を上下に素早く舐め、もう一枚がくびれを回って擦り、舌の先端で鈴口を抉るように責めて、すでに高揚していた炭治郎の身体は我慢ができなくなってしまう。
加えて、秘孔に挿入された指が前立腺を押し、我慢することもできず、炭治郎は雛先から白液を吐き出した。

「あぁぁっ・・・！」

儚い艶声を上げて一瞬の快楽を貪るが、そのすぐ後に襲ってくるのは後悔だ。鬼の口で果ててしまうなど、鬼殺隊としては切腹ものではないだろうか。

「ははは、出た出た・・・気持ちよさそうな顔しやがって、こっちはどうだ？」

吐精したばかりで萎えた炭治郎の雛先をまだ二枚の舌で弄びながら、秘孔に突き挿れた指を小刻みに動かし、性感を高めてゆく。

（こ、こんなので感じたらだめだ、情けない声なんか絶対に出すな・・・！）

ぐっと口を噤んで声を殺すが、胎内がどんどん熱くなり、身体が昂って裸の肌から珠のような汗が浮き上がる。ゾクゾクとせり上がってくる耐え難い愉悦に、声が出そうになるところを奥歯を噛んで耐えるが、今度は上下に激しく胎を抉ってきた。

「っ！あぁぁっ！うあっ！あっ！あっ、あっ、あっ、あっ！」

炭治郎の限界が極限に達し、快楽に負けて艶声をあげてしまう。声をあげてしまうと快楽を認識してしまい、身体中が熱くなって、胎の感度も上がる。鋭敏な部分を容赦なくずるずると抉られ、宙に吊られた炭治郎の身体が揺れる。

「ほらほら、もう極めそうか？気持ちいいか？まったく、見た目とここは全然違うな。とんだカマトトだ」

「うっ、ぐっ・・・！」

これまでの戦闘や拷問でしつこく凌辱され、人一倍、性的に感じやすい身体にされてしまっている炭治郎の肌は、鬼に蹂躙されているというのにこれまでの苛烈な快楽を思い起こし、勝手に悦んでしまう。

（悔しい、こんな身体に好きでなったわけじゃないのに・・・！）

赫い目を涙で潤ませて奥歯を噛み締める。しかし、突き上げられ、引き抜かれるたびに極悦が訪れ、炭治郎の身体が震える。

「おらおら昇天しちまえ、我慢するんじゃねえよ。気持ちいいんだろ？」

「んっ、ぐっ・・・あぁぁあ・・・っふぁぁ！」

額から汗を流して絶頂を耐えていた炭治郎だったが、鬼の指が前立腺をしつこく抉り、我慢は決壊した。

「んんんん――――――！」

せめて声は出すまいと歯を食いしばり、炭治郎は胎で達悦を迎える。洞内が絶頂で痙攣し、鬼の指を強く締め付けてしまう。

射精と違って達してすぐに終わるのではなく、ゆっくりと降下してゆく胎の快感を知っているのか、鬼は炭治郎が達してもすぐに指を引き抜かず、ゆるゆると抽挿を繰り返して、粘質的に責め続ける。

※※※

炭治郎の喉から妖艶な声が零れ、背中が弓なりに反り返り、その反応を見て鬼は笑みを深めた。

「すげえ感じようだな。どうやらここも、かなり弄られてるな？触り続けると極めるんじゃないか？」

「っ・・・・」

恥を晒されて炭治郎は奥歯を噛んで悔しがるが、羞恥の方が先に立つ。
しかもこの鬼は閨事の技巧にかなり巧みなようで、すでに炭治郎の身体を知り尽くしたかのように、快楽の源泉を溢れさせてくる。
鬼の美貌や淫術を使った鬼血術を使う事から、人間だったときの業を思わせる鬼だった。
しかし今の炭治郎は、目の前の鬼の素性を慮っている場合ではない。

鬼の舌が左胸を舐め始め、生温かいがざらざらした感触に意識せず声が出てしまう。

「あっ、あっ、あぁぁぁっ・・・！」

上半身にゾクゾクとした快楽の走破が止まらない。炭治郎の身体はすでに汗に濡れ、手触りはしっとりと変わり、鬼の触れる掌を悦ばせてゆく。

「そそるなあ、お前・・・」

鬼が桜色をじゅうと吸い上げると、一気に快感が高まり、背中に電流が流れるほどの愉悦が流れ、炭治郎は深い胸絶頂に堕とされた。

「んっ、んん、んん――――――！」

胸に灼熱の熱さが広がり、上半身と、まだ達悦していない左の桜色をさらに激しく疼かせる。

「おお、すげえ善がりようじゃねえか。これは胸で達してるな？ほんとどこまで淫乱な身体してんだよ。一人や二人の相手じゃこうはならねえよな？なあ？」

そう言うと鬼は左の桜色に歯を立て、硬くした舌先で円を描くように舐め回し、悦の波を絶え間なく送り込んでくる。

「んっ、んぁぁ、はぁ、はあ、や、やめろ・・・」

「そんな蕩けた声で言われてもなあ、ほら、こっちも反応してるじゃねえか」

ここ、と言って鬼が膝で炭治郎の両足の間を捏ね回す。

「あぁっぁあっ・・・！」

反応しきって先端から淫蜜を流し続けるようになっていた雛先に、突然刺激を与えられ、炭治郎の喉から耽溺した声が零れる。
胸の快楽だけですでに体中の性感帯が発情状態になっている。そしてより敏感になって快感を欲して疼き続けていた雛先が、ようやく与えられる愉悦に歓喜した。
完全に力を持っていた炭治郎の雛先が、鬼の膝で反発しながら左右上下に弄ばれ、腰が蕩けるほどの快感が襲ってくる。

桜色を責めていた唇が動き、今度は炭治郎の両鎖骨の下へと舌を伸ばしてきた。鬼の舌が触れると、その部分が淡く発光し、二重の同心円の輪が浮かび上がる。

「っ、ぐっ、うあっ、あ、あぁぁっ！」

鬼が輪に舌を這わせるたびに身体の快楽がどんどん高まり、耐えきれず炭治郎が甘い声をあげた。
快楽の感度がどんどん上がるのに、両の桜色は繊細な指使いで責められ、下半身も膝で弄ばれ、身体中は愉悦で甘い悲鳴を上げている。

「あぁぁっ、あっ！や、やめろ、だめっ・・・！あ、はぁ、あぁぁ・・・っ」

鎖骨から舌を離し、首元や耳や頬に口づけ、炭治郎のはあはあ、と欲情する吐息を聞きながら、身体中を快楽漬けにする鬼が笑う。
身体が熱くてどこも気持ちがいい。しかし無理矢理に与えられている快感が悔しくて、炭治郎は愉悦を堪えようとするが、鬼の血鬼術か、淫蟲のせいか、身体の昂りが止められない。
悔しさと一斉に与えられる絶頂近い体中の快楽に、炭治郎が赫い瞳から涙を流す。頬を伝う熱い雫を感じ、泣くなんて情けないと思いながらも、身体は否応なく絶頂へと上り詰めて行った。

「んっ、んんっ！だ、だめ・・・あぁ、あ、っ、あぁぁ、あっ！あああああっ！」

炭治郎の身体を一度抱いただけだというのに、この若い身体の達悦の瞬間を全て把握しているかのように、一気に身体中を絶頂へと導いていく鬼。
胸も雛先も最高潮に昂る。炭治郎は快楽で狂乱し、息を激しく乱してむせ返るほどの淫気を醸し出し、身体中から珠の汗を浮かべて、責められている全ての個所で一斉に達悦を迎えた。

「――――――――！っ、あ、あっぁあぁあっ！あっ！ああ、ああ――――――――！」

覆い被さっている鬼を弾き飛ばさんばかりに身体を仰け反らせ、身体中から甘い汗を流して全身を痙攣させて許容以上の激悦に耐える。
両胸は同時に絶頂し、雛先からは白液が吐き出された。

「は、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

絶頂してなお、首元から男心を誘う淫靡な熱を揺蕩えながら、炭治郎の瞳から涙が幾筋も伝う。鬼はその涙を舐めとり、面白そうに絶頂で体中を痙攣させている炭治郎を見下ろしている。

「お前相当感じやすいな。まあ安心しろ。淫蟲がいる間は、いくら達しても精液がある限り延々と体力が続く」

「んっ・・・んん、ぐっ・・・はあ、はぁ・・・」

鬼の言葉が伝わっているのかいないのか、炭治郎は未だに身体に沁み込み続ける極悦に、熱い吐息を荒げながら、拘束されていない部分をモゾつかせて快楽を収めようとしている。
全身をグッタリさせた炭治郎を自由にして、鬼は片足を担いで肩にかけると、そのまま剛直を秘孔に突き当てた。

「あっ！あっぁあっ！熱い・・・！」

達悦の余韻に浸っていた炭治郎だったが、突然与えられた秘孔への刺激に、弾かれたように身体を跳ね上げて反応を返す。
炭治郎の秘孔からは、これまでの身体の愛撫で淫蟲の作用によって、女のように蜜を垂らすようにされている。同時に体中の性感帯を何度も絶頂させられ、一度も触れられていない腰が疼熱でおかしくなりそうだ。

「すげえ、物欲しそうにヒクついてるぞ・・・液もダラダラ流れてるし、どんだけ淫乱なんだよ」

「ううっ、これは、変なものを、植え付けられた、せいでっ・・・・！」

「いくら淫蟲を植え付けられても、二回目の目合いでここまで感じたヤツなんていねえよ。全く、こんな純粋そうな顔してんのに、ここにどれだけの魔羅を咥え込んだんだ？」

ひどく屈辱的な事を言われているのに、屈辱よりもこれからの快感を期待して身体がどんどん昂ってゆく。このまま挿入されず、焦らされるとなってしまったら耐え難い。

「ほら、身体の力抜け・・・いくら濡れてるって言っても、入口を締められちゃ挿れられねえからな」

あけすけに物を言う鬼に反抗心が湧くが、炭治郎の身体はちゅ、ちゅ、と突かれる刺激とせり上がる愉悦で無意識に開いてしまう。

「よし、いい子っ・・・！」

肩にかけた炭治郎の足を引き寄せ、狭い入口を割って鬼の剛直が挿入された。

一気に脳天まで駆け上がる衝撃と愉悦に、炭治郎が我慢できず艶声をあげ、雛先から白液を零す。

「あああぁぁあっ・・・・・！」

※※※

「おい、生きてるか？」

朝になって、鬼が炭治郎が一晩中責め続けられていた触手部屋に入ってくる。

「んっ・・・・む・・・・・ぅぅ・・・・んぐっ、ん、んん・・・」

力ない声で炭治郎がくぐもった声をあげている。
両手両足を肘から触手に巻き付かれ、天井から吊るされて拘束されている。その炭治郎の秘孔には疣の連なった触手、前には口触手が三本ねちねちと愛撫を続け、両胸には吸盤触手がとりついて、ちゅぽちゅぽと音を立てながら桜色を何度も引っ張って激しく感じさせている。目立った性感帯以外にも、背中には花弁のように口を広げた触手が張り付いて、ゆっくり上下に動いて感じさせている。

幼い唇には男根の形をした大ぶりの触手が無理矢理挿入させられ、炭治郎の顔面を淫液と唾液でひたひたに濡らしていた。

「意識はあるかー？あるなら返事しろ」

口を犯していた触手が吐き出されると、炭治郎の顔面へ湯あみのように精液を大量に吐き出した。

「ぷは、はぁ・・・あっぁ・・・」

炭治郎の身体が小刻みに痙攣し、雛先から透明の淫液が吐き出され、太ももから大量の精液の塊がどろりと伝い、落下する。
炭治郎の身体に触れていた触手たちが、次々と白い穢液を炭治郎の裸体に噴きかけ、全て終わったと思われた瞬間、身体の拘束がなくなり、炭治郎は触手の床に倒れ伏した。

「ぁ・・・・ぁ・・・はぁ・・・・」

赤い髪にも大量に吐き出されたらしく、額から汗と精液が半顔を染めるかのように大量に伝ってゆく。

炭治郎の様子は精も根も尽き果てた被虐感に満ち、これだけひどく凌辱された後だと言うのに、身体をヒクヒクと痙攣させる様が、さらに見る者の加虐心をそそってくる。

「生きてはいるようだな。どうだ、意識はあるか？」

足で転がして仰臥させ、炭治郎の顔を見るが、その表情は淫蕩に陶酔し、あれだけ勝気だった赫い瞳にも力がなくなっている。涙を流し続けて赤みを帯びた瞼と、精液に濡れた顔が蠱惑的で、首を傾けて横を向くと、口から大量の精液を吐き出した。

「ごほっ・・・ぐっ・・・かは、はあ、はぁ、はぁ、はあ・・・」

一度両目が強く瞑られ、開かれたときには瞳へ僅かに力が戻っていた。

「おーおー、耐えきったか？お前なかなか根性あるな。生意気だったから最初から強めの責めでしかけたんだが、気に入ってくれたか？」

鬼が炭治郎の有様を嗤いながら覗き込んでくるが、炭治郎は何も考えられず、ただ目の前の美しい鬼が自分に何かを話しかけている、ということだけが認識できた。

鬼が炭治郎の傍らに座りこみ、上から顔を覗き込んで言った。

「とりあえずこれから風呂だ。そのあと、ジジイがお前に会いたいだとよ」

すでに身体に触れる物はなにもないというのに、炭治郎の身体は未だ絶頂の愉悦が続き、胎へ大量に中出しされた触手の精液が、まるで意思を持って蠢いて、未だに炭治郎を責め苛んでいるかのようだった。

（気持ち・・・よく・・・ない・・・）

稲妻が落ちるほどの激悦を何度も叩き込まれたと言うのに、炭治郎の心は呪詛のようにその言葉を繰り返し、屈するのを拒んでいた。

※※※

「若い時の復讐だよ。わしを不細工と罵って鼻で笑った顔の好いヤツら。全員憎いね・・・」

言いながら炭治郎の下腹部に掌を乗せ、少し力を入れて押す。

「んんっ・・・」

胎の中で淫蟲が反応し、炭治郎の身体をじわじわと欲情で包み始めた。

「お前もあと十年・・・いや、五年たてば、あ奴らと同じになる。わしは美男子が趣味だが、たまにはお前のような小僧を使って、稚児遊びと言うのもよかろう」

（なんなんだ、この人から流れる昏い匂いは・・・？）

炭治郎はここまで長年生きてきた老人を初めてみたが、それは決して人生の師と呼べるものではない。暗い怨嗟を身体に抱えた、人間ながら鬼以上に邪悪な所業、思考回路をしている。

「っくく、そんな目でわしを見るな。これでも慈善事業にも勤しんでるぞ？わしの援助で、これまで何百人もの子供を救ってきた。お前のような小童をな・・・」

「さ、触らないでください・・・！」

淫蟲が炭治郎の肌を強制的に欲情させ、気味が悪いはずの老人の手で感じてしまう。

「ふん、身体は傷跡だらけだが手触りは上々と言ったところか。本当に羨ましいわい、この張り切った肌・・・」

人間は長く生きるとこんなに考えが醜く歪んでしまうのだろうか。例え何百人の子供を救ったところで、捕らえて手慰みにされた人間たちが救われるはずがない。

「あなたの考えは間違っています！なんでそんな捻くれた考え方をするんですか！」

すると老人はいきなり炭治郎の雛先を鷲掴みにしてきた。痛みを感じるほど強くはないが、明らかに意趣返しの意味を込めた強さで握り込んでくる。

「人間長く生きると、こうなるんだよ。汚いものを、何も見てきたことがないような目をしおって・・・」
多野が濁った眼で炭治郎の赫い瞳を覗き込んでくる。炭治郎は、負けじと強い力で老人を睨み返した。すると多野は、炭治郎の赤い髪を掴んで後ろに引っ張り、痛みに顔を一瞬歪ませた表情を見て笑った。

「くく、そそる、そそるなあ・・・」

炭治郎はぞっとした。いろいろな人間の匂いを嗅いできたが、この老人から放たれる、枯れた木のような、石が砂になるような粉々しい香りに混じって、下水のような臭気を感じる。
しかしこの臭いは昨日の鬼からも漂ってきていた。人間を心の底から憎悪する、負の臭い。救いようのない絶望に似た臭い。

「んっ、んんっ、ぐ、離せっ・・・！」

多野が炭治郎の雛先を手で捏ね回し始めると、嫌なのに、胎の淫蟲のせいで性的な反応をしてしまう。
もう一方の自由な足で跳ねのけようとしたが、やはり足を浮かせたところですぐ触手に捕らえられてしまった。
両手は左右に広げられ、足も膝から先に触手が巻き付いて全く動かせない。

老人に雛先を上下に擦られ、ぞぞっと愉悦が押し寄せてくる。こんな手で感じたくなどない。だが、炭治郎の雛先はすでに淫液を零し始めていた。

「本当はお前ではなく、水の美剣士をこうしてやりたかったがな・・・お前も水を使う剣士か。ふん、指名の仕方が悪かったな。同門か？」

「・・・・・・」

炭治郎は答えない。

「沈黙は肯定だ。そうか、よもや兄弟子か？それなら、お前が代わりに凌辱されているのを聞きつければ、代わりに身を差し出してくるかな？」

二人揃って可愛がってやるぞ、と言って邪悪に笑う多野に、炭治郎は腹を立てた。

「義勇さんをバカにするな！あの人はそんな事で軽々しく動くような人じゃない！」

「ほう、ぎゆう？義勇というのか、あの剣士は」

「っ・・・・・！」

炭治郎は自分の口を閉じた。つい激情に駆られて声を荒げてしまったが、自分から醜態を晒す真似をしてどうする。

「それでは、お前がいなくなった、とでも文を送ろうか」

「だから、あの人はそんな甘い人じゃない！俺なんかにいちいち構っていられるような人じゃないんだ！」

しかし炭治郎は内心では焦っていた。
義勇は口下手ではあるが、心はとても優しい。炭治郎がこのような状況に陥っていることを知れば、義勇なら代わりに身を差し出すだろう。
もしそんな通達を受け取ってしまったら、罠と知っても義勇が来てしまうかもしれない。
それだけは絶対に阻止しなければならなかった。

（なんとかしないと、なんとかしないと・・・！）

焦る炭治郎の一方で、老人は炭治郎の秘孔へと指を這わせ、そこへ指を一本突き挿れてくる。

「蟲がちゃんと巣食ったようだな。ちゃあんと濡れている・・・」

そのまま指を抽挿され、炭治郎は微細な刺激も強力な悦としてとり、身体が勝手に発情してしまう。指をかぎ状に曲げたまま、ぐるりと中で回され、ぞくぞくと快感がせり上がってくる。

「んんんっ・・・！」

快楽を感じている間は、炭治郎は何も考えられない。ただ、犯されるためだけの身体を身悶えさせる。しかし心の焦りは感じていた。なんとか老人の興味を義勇から逸らさなければならない、と。

「お、俺も、女の人をたくさん、だ、抱いてる！」

自分でも何を言っているんだと思いながらも、炭治郎は言ってしまった言葉に引っ込みがつかなくなった。

「ほおおー、何人抱いた？」

「えっ？あっ・・・お、覚えてない！それぐらい抱いた！」

嘘でもこんな閨事の話をするのは恥ずかしい。頬に朱が差す炭治郎を見下ろし、老人はさらに尋ねる。

「名前は？」

「っ――――――！」

どうしよう、と一瞬逡巡したが、炭治郎は思い切って言った。

「なほちゃん、きよちゃん、すみちゃん、しのぶさん、アオイちゃん、カナヲ・・・！」

（ごめん、勝手に名前を出してしまって・・・！）

心の中で彼女たちに謝りながら、炭治郎は思いつくままの女性の名前を上げる。非常に申し訳ない。

「そうかそうか。何と言って口説いた？」

「えっ・・・くど・・・」

炭治郎が戸惑っていると、多野は炭治郎の雛先を激しく擦り始めた。

「んんっ！あ、やめっ・・・！」

腰の奥に愉悦がせり上がり、足が勝手に緊張してしまう。老人の手だというのに、炭治郎の性感帯は、刺激を簡単に快楽に変換して愉悦を貪ってしまう。

「くく、嘘が下手な小僧だ。お前の魔羅を見れば、女など抱いたことがないとすぐにわかる。加えて、尻の反応はどうだ。ええ？」

多野は胎内に挿入しっぱなしになっている指を左右にグリグリと捻り、鋭敏な内壁を容赦なく抉る。

「あぁあああっ！あっあああっ！や・・・っ、あ、やめ・・・！」

腰を痙攣させて感じ入る炭治郎の乱れる様子を見て、老人は大きな声で笑った。

「ははは、完全にネコじゃないか！一体何人の男にこの身体を明け渡した？」

「ね・・・ネコ・・・？」

「男同士で目合う時、女役になる者のことだ。そんなことも知らないのか。なるほど、経験は多いくせに知識は浅い・・・お前はどうやら、凌辱されまくっているようだな」

「そ、そんなことはない！」

不名誉な事を言われて炭治郎は反射的に反抗したが、思い返してみれば、合意の上で致した人数は二人しかいない。あとの者たちは、名前も知らない。

「童貞のネコが意気がるな。兄弟子がそんなに大事か？」

多野に全て見透かされていたことに羞恥と悔しさを感じ、炭治郎は奥歯を噛み締めて老人を睨んだ。しかし指をまた激しく抽挿されて、意識が快感に流される。

「あ、あっ、あぁあっ、あ、あ、あぁっ！」

身体を仰け反らせ、胎で感じる圧倒的な快感に炭治郎が女のような声を上げる。淫蟲が反応しているのか、中がとろりと濡れる感触で満たされる。

「んっ、ぐ、うぅぅっ・・・！あ、あぁあっ！」

じゅぽじゅぽと淫らな水音が響くほど激しく抽挿され、胎の中が快感で熱くなり、絶頂への紐を絡んでしまう。体中が熱くなり、少しずつ身体が愉悦で煮立ってくるのを感じてしまう。

老人は指を三本に増やし、炭治郎の秘孔に改めて突き挿れた。

「うぅぅっ！」

苦悶に似た声を上げて、炭治郎が腰を上げる。しかし胎は熱く、濡れた中が炭治郎の快感を表している。老人は指を抽挿しながら角度を変えて何度も内壁を探り、ある一点で炭治郎の身体が反射的に激しく反応するのを見て嗤った。

「なるほど、ここか、ここがお前の性感帯か」

※※※

「それにしちゃ趣味が変わったらしいな。今度は可愛いガキか。本当に元気なジジイだよ」

半裸の炭治郎の姿を見て、男たちが笑いながら近づいてくる。

「お前たちは何なんだ？誰だ」

身体を拘束されていても、炭治郎の威勢は変わらない。男たちは下卑た視線を炭治郎に向け、薄気味悪く笑っている。

「この館の用心棒だ。まあ、表立った仕事じゃなくて、裏の仕事の方の、だがな」

（裏の仕事？）

昨日の老人からは、真っ当な人間からは放たれない気味の悪い臭いと、炭治郎が今まで嗅いだことがない不思議な匂いもしていた。もしやその香りに関係がある仕事だろうか。

「それより、今日はジジイが留守だからな。お前、身体に蟲を入れられているんだろう？」

男の一人に言われ、炭治郎は屈辱と怒りで顔を朱くさせた。好きで中に寄生させられたわけではない。しかし、炭治郎の事情を知っているという事は、この男たちは鬼の存在も知っていることだ。
悪人同士、手を取って何を仕出かしているのだろうか。炭治郎は男たちを睨みつけながら、拘束が解けないか精一杯力を籠める。
しかし触手のぬるりとした感触が、性的に鋭敏になった炭治郎の官能をくすぐり、思ったように力を出せない。途中で挫かれる。

「へえ、珍しいな。赤い髪に・・・目も赤いのか？こりゃ変わり種だな」

炭治郎が反論するより早く、一番前の男が炭治郎に手を伸ばし、羽織に半分隠された裸を撫でてきた。

「あっ・・・！」

ぞくん、とそこから愉悦が湧き上がり、炭治郎は一瞬自分の声に失態を感じたが、もう遅かった。

「蟲が入ったヤツは反応がいいからな。今日はジジイに変わって、可愛がってやるよ」

すると炭治郎の拘束が一瞬解け、すぐさま動こうとしたその体を再び触手に巻き付かれて拘束され、今度は床へ四つん這いになるように縛られる。

「うっ・・・！」

触手はいつもどこからともなく飛んできて、根元の先は黒い影で見えなくなっている。今度は床から生えたような触手に両腕の自由を奪われ、炭治郎は歯噛みする。

男たちは炭治郎を囲み、背中を隠していた羽織を捲って、裸を露出させた。

「背中は綺麗なもんだな。尻の肉付きもいいじゃねえか」

そう言うと男の武骨な両手が炭治郎の腰回りに添えられ、そのまま肩甲骨に向かって撫で上げる。

「んんっ！んっ！うぅっ！」

ぞくぞくと湧き上がってきた快感に炭治郎は耐えながら目をつぶる。胎が濡れる気配がして、中の淫蟲が再び蠢き始めたようだ。
そして炭治郎の眼前に、男の萎えた陽物が垂らされる。

「お前らは男の子種がないと死んじまうんだろ?だったら奉仕しないとな・・・」

口淫しろ、と強要しているのだ。汚らわしい男の局部を見せられ、炭治郎は露骨に嫌な顔をし、顔を背けた。

「誰がそんなこと・・・!」

「そうかよ、しょうがねえな・・・」

そう言うと男は廊下に並べられていた高給そうな壺に手を伸ばすと、それを手摺りから投げ、吹き抜けになっている一階に投げる。

「あっ!あぶない!」

炭治郎の声は少し遅く、下を歩いていた女給の頭へまともに当たり、女給は頭から血を流して倒れた。

「な、なんてことを！」

しかし男は悪びれた様子もなく言った。

「お前が言う事をきかないからあの女があんな目に遭ったんだぜ。どうする？壺とか、他にも投げる物はたくさんあるぜ？ほら・・・女たちが集まってきた・・・・」

倒れた女給を心配して、他の使用人たちが歩み寄ってくる。その様子を見せられ、炭治郎は男に従うしかなかった。

「わ、わかった、する・・・」

「よしよしいい子だ。自分が気持ちいいと思う部分に唾液をたっぷり乗せて舌を這わせるんだ。それとも、自分でしたことないか？」

愛らしい見目の炭治郎を完全に馬鹿にして、男たちが笑う。

（くそ、こいつら許さない・・・！）

暴れだして殴り倒したいが、炭治郎に選択肢はない。
男の陽物が炭治郎の顔面に垂れ下がり、嫌悪で首を左右に振るが、頭を両腕で抱えられて動きを止められる。口元には、萎えた陽物。

「くっ・・・！」

炭治郎は身が張り裂けそうな屈辱を感じながら、陽物へと舌を這わせ始めた。
固定された頭で、ぐったりと萎えた穢棒を扱うのは難しかった。頬や鼻先を擦り、炭治郎はなんとかその先端を口に収める。
唾を乗せて感じやすい先のくびれ部分に舌を回し、時折吸い上げながら舌で鈴口を舐めてやると、陽物に力が入ってきた。
裏筋に舌を這わせて必死に舌を使って剛直となった男の雄に奉仕する。

「なんだ慣れてるな。もう調教済みか？ガキの癖にマセてんな」

（うるさいっ・・・！）

怒りの声を上げたいが、この男を満足させれば他人へいたずらに被害は加えないはずだ。

※※※

確かに鬼の言う通りだが、炭治郎はその話に違和感を覚えていた。頭が眩むほどの絶頂直後の上、涙が出るほど疼いている胎が思考能力を削ぎ、炭治郎にその正体を気づかせない。

「精液がないとお前干からびて死んじまうぞ？それでもいいのか？」

『死』と言う言葉を聞いて、炭治郎はそれだけは回避しなくてはならない、と反応する。

「だ、だめ・・・」

「じゃあ、俺にお願いするんだな。精液が欲しいか？」

「・・・・・・・」

炭治郎はもはや激しく拒絶するのではなく、黙り込んで目をつぶった。しかし、鬼は優しくない。

「ちゃんと言えよ。精液くださいって言うだけで助かるぜ？」

（死ぬことはできない、ここから逃げなきゃならない・・・禰豆子・・・）

炭治郎は震える唇で言った。

「せ・・・精液・・・ください・・・」

言った直後、取り返しがつかない思いに囚われたが、すぐに腹の疼熱がそれを消し去り、身体は快楽を乞うたことで得られる快感を、すでに待ち兼ねて早くもざわめき始める。

「まあまあ合格かな？これからはちゃんと自分の言葉で言えよ？今夜は最初だから、これで勘弁しておいてやるよ・・・」

そう言うと、鬼は炭治郎の両膝裏を抱え、腰に力を入れた。ずっと強力な刺激が欲しかった胎にようやく逞しい刺激が訪れる歓喜に、身体中が沸き立ってしまう。

「あ、あ、あぁぁあああ、あっ！あぁぁぁっ！」

鬼は大きく腰を使って、先端を残して引き抜くと、間断なく根元まで挿入し、最奥を穿つ。
ずっと焦がれていた快感をようやく与えられ、炭治郎は何も考えられなくなり、快楽に堕ちてゆく。頭では何も考えられないが、身体はこれ以上ないほどの歓喜で震え、最上の状態で鬼の剛直を迎え入れる。

「気持ちよさそうな声上げやがって・・・ほら、俺は淫乱ですって言ってみろ」

高圧的に命じられて腰を小刻みに揺さぶられ、振動快楽に頭が犯されて身体の快感が先に立つが、そう言われて炭治郎の被虐の花が小さく咲いた。

「あぁあっ！お、俺は、いん、ら、ん、ですっ・・・！あああぁっ！あっ！あ、あ、あ、あっ！あぁっぁあああっ！」

言った直後、胎が一層剛直を締め上げ、鬼に極上の快楽を与えてくる。中の淫蟲が歓喜に沸いて淫液を出しまくり、胎の中をひたひたにして剛直の抽挿を潤滑にさせる。

「あっ、あっ、あっぁっ！あぁぁああ――――――！」

突かれるたびに、引き抜かれるたびに炭治郎は達し、絶頂から降りられない状態にされてしまう。あまりの激烈な快感に瞳からはとめどなく涙が流れ、身体はブルブルと痙攣し、身体中の性感神経は愉悦で痺れ、その快楽の凄さに、ただ翻弄されるのみだった。
しかし炭治郎の性感神経を操る淫蟲はこの程度では満足せず、鬼の精液を欲しがってどこまでも炭治郎の身体を高めてゆく。

「うっ、うぅ、うあ、あ、あ、あ、あ、あっぁあ・・・っ」

叫びすぎて鼻にかかった甘い喘ぎ声しか出せなくなった炭治郎を揺さぶり続け、通常の人間ではありえない胎の動きを体現し、鬼をすこぶる喜ばせる。

「ほら、待ち望んだ精液だ！たくさん注いでやるから、しっかり味わえよ？」

鬼の腰遣いが一層激しくなり、炭治郎は絶頂と愉悦に挟まれて甘い声を上げるしかできない。思考の入る隙すらなく、ただ激しく揺さぶられ、触れられていないのに雛先からは断続的に白液が吐き出される。鬼の突き上げが一際深くなり、炭治郎が胎の奥で身体がバラバラになりそうなほどの激悦を感じながら、待ち兼ねた鬼の精液を受け入れた。

「あぐっ――――――――！かっ・・・は・・・・！」

達悦の瞬間は圧倒的な激悦にまともに声を出せず、炭治郎は喉を震わせて万感の艶声を吐く。聴く者の耳を蕩かすような淫蕩な声を放ち、身体の愉悦に全身を小刻みに震わせる。
一番熱くて身体の悦が強いのは、当然淫蟲に支配された最奥だ。枯渇していた栄養剤の役目も兼ねた鬼の精液を受けて、胎の中で蠢いて歓喜に沸いている。しかし、蟲の動きは妖し気で、まだこれだけでは足りない、とばかりに極細の触手を伸ばして洞内の体液を余すところなくなぞり始める。

「は、あ、ああ、あ、ああっぁ・・・・」

ほとんど意識を失いかけた炭治郎だったが、そんな妖艶にまみれた少年の表情を見下ろし、鬼は涙を舐めて頬を吸い、なだめるような愛撫を仕掛けるが、再び挿入され続けている剛直を固くさせた。

「っ――――――――！」

炭治郎がその脈動を感じ、腰をブルリと震わせて、再び訪れる極悦の予感を察知する。

「も・・・・やめ・・・・」

「何言ってんだ。俺はまだ一回しか出してないんだよ。それに、お前の腹の淫蟲を満足させるには、一晩中交わるから覚悟しろよ？」

一回の目合いだけで愉悦で虫の息にされた炭治郎に、ぞっとする言葉を投げかける。しかし、胎の奥が熱い。体中の性感帯が再び敏感になり、炭治郎は自分の身体の火照りに熱い息を再び繰り返し始めた。

「お前が快楽に堕ちて完全な淫乱になるまで、抱き尽くしてやる」

そう鬼は宣言し、炭治郎の腰を鷲掴みにした。

※※※

炭治郎は男のくせに、こんな場所に張り型を飲み込める身体を鳴きそうなほどの羞恥に感じながら、恥ずかしくてたまらなかったが、小さく声をかける。

「お、俺は大丈夫・・・自分のことだけ考えてください・・・」

はぁはぁと息を吐きながら炭治郎は弱い声で女給に声をかけたが、その声でピタリと女給の動きが止まった。

「洋子！何をしている、すすめろ！」

老人に怒鳴られて女給は顔に苦悶を表しながら、申し訳ありません、と叫び、炭治郎の胎に張り型を全て挿入した。

「うぅうぅっ――――――――！」

あまり激しく身もだえると女給に罪悪感を与えてしまう。炭治郎は暴れ狂いたいぐらいの激感を感じながらも、歯を食いしばって耐えた。女の人に操作され、性具を扱われて感じる快感がいつもより強烈だ。一瞬女給と目が合ったが、互いに目を逸らし、炭治郎はますます恥じ入ってしまう。

「だ、大丈夫、俺は大丈夫です・・・」

務めて明るく言ったつもりだったが、声は震えてしまう。
するとその直後、荒い息を繰り返して胸を上下させる炭治郎の前髪を掴むと、老人はギラついた目で叫ぶ。

「他人の心配をしている場合か？お前はこれから何をされると思う？泣いて止めろと乞うほどの仕打ちをしてやるから、人に情けなど掛けるな。反吐が出る」

（こっちこそ反吐が出そうだ）

女給にされた恥ずかしさでずっと快感を放逐したままだったが、愉悦はしっかりと炭治郎を捕らえ、胎内を刺激して下半身が快楽に浸りきっている。何度も涎が垂れそうになるが、なんとか全部飲み込んで醜態をさらすまいと炭治郎は繕う。
昨日も最低な人間だと思ったが、今日ほど相手を最低な人間だと思ったことはなかった。

そんな人間に身体を触れられるなど、まさしく反吐がでそうな状況だったが、炭治郎の身体は裏切り、胎の中の淫蟲が快楽を欲して激しく蠢く。

「くっ・・・う・・・うぅ・・・！」

多野は女給と変わり、全てを潜らせた張り型の取っ手部分を掴むと、一気に引き抜いた。

「っ、あ、あぁぁああっ！」

堪らず炭治郎が声を上げる。淫蟲の淫毒で感じやすく、快感を拾うだけになってしまったそこへ、引き抜かれる刺激は強烈な快感で、炭治郎の意思にかかわらず、快楽の悲鳴を上げてしまう。
しかしすぐにまた一気に奥まで挿入され、最奥を打たれる衝撃に腰が甘く痺れた。

「はぁぁぁっ・・・・！」

身体を痙攣させて激しい刺激に耐える炭治郎だったが、老人は素早い調子で抜き挿しを繰り返し、炭治郎に考える隙を与えなかった。

目端に近くで佇む女給の気配を感じて、すぐに正気に戻って声を抑えようとするが、与えられる張り型からの快感は抑えられるものではなく、炭治郎は声を張り上げて艶声を上げてしまう。

「あっ！あっ！あぁぁっ！あ、あ、あ、あぁぁっ！うあぁぁあっ！」

刺激を全て強烈な快感にすり替えてしまう洞内をめちゃくちゃに抉られ、最奥を連打されて、稲妻のような快感が止まらない。
一気に最奥まで突き上げられて、そこで左右に捏ね回されたとき、炭治郎はたまらず快楽の叫びをあげ、赫い瞳から涙をこぼした。

「あ、あぁっぁあああああああっ！」

「ほれほれ、好いだろう？お前は尻を責められるのが好きだな、男子のくせに、情けない・・・」

「うぐっ・・・んん、あぁ、はぁあぁぁあああ・・・っ」

多野の煽る言葉に反論したかったが、口を開けば喘ぎ声しか出すことができない。

奥を捏ね回され、絶頂がずっと続いた状態では、炭治郎でなくとも意識が飛ぶだろう。さらに追い打ちかのように、淫蟲が蠢いて生えた触手を暴れさせて、内壁を乱打し、快楽の追加までしでかしてくる。

（・・・な、なにも考えらえない・・・）

わずかに開かれた炭治郎の唇から唾液が伝い、腰を中心にして全身に広がる愉悦の伝播に、身体中の性感神経が犯される。張り型を動かされるたびに女のような裏返った声が喉から紡ぎだされ、老人を愉しませている。
身体の愉悦で、女給の存在などすでにつけ入る隙も無く、炭治郎は淫に乱されて身体を震わせる。

「どうだ、これで減らず口もたたけなくなったか？」

ようやく多野が張り型の抜き挿しを止めたが、最奥に付き込んだままグリグリと捏ね回してずっと炭治郎を感じさせる。

「うぅっ、う、はぁ、あぁぁっ・・・や、やめろ、変態・・・」

身体中を走り抜ける甘い痺れと腰を蕩かす淫悦に意識を流されそうになりながら、炭治郎は辛抱強く耐え、未だ反抗の言葉を口にし続ける。

「ふん、まだそんな口が叩けるか。もっと好くして、強請る言葉を吐かせてやる」

すると老人は炭治郎の胎に挿った張り型を操作し始め、次の瞬間、バイブレーターの振動が胎内を襲った。

※※※

「本当は舌は膨れてしゃべれないんだけどな・・・まあ、ご都合だ。見ての通り、顔は梅毒で潰れた、達磨人間よ」

壱はそう言うと、ベッドの上で胴体だけになった身体を揺らして笑った。

「これでも見世では一番だったんだぜ。だから俺は「壱」って呼ばれてたんだ。通れば誰もが振り返る色気漂う美男ってな。ケチがつき始めたのは、デカマラのオッサンの相手をして、ケツをわざと壊されてか

らかな。そのせいで客が取れなくなって、魔羅も勃たなくなっちまったから、女の相手もできねえ。さらに悪いことに、梅にかかっちまって・・・まあ、それがエライ痛みでな。暴れる音がうるせえってんで手足斬られて、見せ物にされて、飽きられたら河岸の道ばたに捨てられたのよ」

壱が悲惨極まる自分の過去を語っている。酷すぎて、炭治郎には目の前の姿を見せられていなければ、それを信じることができない程の話だった。

「そこであとは死ぬだけだったんだけれどな・・・まあ、運よく鬼様に出会って、元の色男の姿を手に入れましたとさ・・・って訳なんだよ。本当に俺は運が良い」

そこまで語ると、壱は元の頭身に戻り、炭治郎の前に美しい顔を突き出した。炭治郎の顔をよく見ると、赫い目に涙の膜がかかり、今にも零れ落ちそうになる。

「おい、お前・・・」

「そ、そんな、酷い・・・なんて・・・なんで、そんな・・・！」

炭治郎は、悲しみと怒りのせめぎ合う心の行き場が無くて、言葉が上手く出てこない。その代わりに、その大きな瞳から涙が頬を伝った。

「なんでってなあ・・・俺は１３の時に京都から見世に連れてこられて、わけもわからずとにかくご奉仕だったからな。世の中のことなんか知らねえし、疑問に思ったこともあんまねえ。それに、こういう似た末路を辿って野垂れ死んだ奴らを、多く見てきた。俺もそいつらを嗤っていた分、御鉢が回ってきたってだけさ」

言いながら何故か笑顔を浮かべる壱だったが、炭治郎が突然自分に抱き着いてきて驚愕した。

「な、何のつもり・・・」

※※※

内部を蟲に扱かれ、外部を壱の手管で刺激され、内と外の両挟みの激感に、炭治郎は言葉をまともに発することができない。身体が勝手にビクビクと痙攣し、雛先からとろとろと淫液が零れ、入りきれなかった蟲の先端が鈴口を捏ね回している。

（あたま、おかしくなるっ・・・感覚が、強すぎる・・・！）

これまで感じていた快感が米粒のように小さく感じられるほど、今感じている快感は激烈な物だった。壱から与えられる表面の愛撫は、これまでの責めで散々受けて堪え方をなんとか掴んでいるが、内から迫る侵入した蟲の愛撫は初めての体験だ。まったく未知に等しい激悦に戸惑い、炭治郎は堪えられず取り乱す。

「あぁああっ！あっ！ああああっ！む、無理、あぁっぁあっ！あっ！ふあぁぁあああ――――――！」

いくら炭治郎が叫んでも蟲は脈動を止めず、延々と尿道を繊毛で責め続けている。凄まじい快感に腰がガクガクと痙攣するが、それと同時に壱の剛直も強く締め付けてしまって、胎内でも快感が弾けてしまう。

「ほらほら、蟲を定着させるぜ・・・この気持ちよさがずっと続くからな。本当に幸せ者だよ、お前・・・」

「はぁ、はぁ、そ、そんな・・・」

（いやだ、そんなの耐えられない・・・今でも、もう何も考えられなくて・・・）

しかし言葉を発することもできない程感じ切ってしまっている炭治郎は、拒否する意思を示すこともできず、そのまま洞内を壱に激しく乱される。

「ぅあ、あっ！あっ！あっ！あっ！あ、あ、あ、あ、あぁぁぁぁぁぁ――――――！」

胎内の蟲が蠢いて、性感を上げた炭治郎の洞内を壱の剛直が容赦なく擦り回し、動かれる度に雛先が上下に振れて尿道内の蟲がさらに脈動する。

「あ、あ、あぁぁぁぁぁっ！い、いや、あっぁぁぁぁっ！あぁぁぁぁぁぁぁ――――――！」

炭治郎の矯声が最高潮に達した直後、壱は炭治郎の胎に精液を放った。体内の蟲が久々に与えられる養分に喜び、炭治郎の中で容赦なく蠢いて鋭敏な洞内を荒らしまくりながら、精液を胎内へ取り込んでゆく。

「ふあ、あぁ――――っ！あっ！あっ！あっ！うぁぁっぁぁぁぁっ！ひぐっ・・・！あっぁぁぁぁぁ！も、む、り、あぁぁぁぁ――――――！」

顔を涙でぐしゃぐしゃに濡らし、炭治郎が下半身で巻き起こる激悦の嵐に乱れまくる。しかし、これだけの激感など辛いはずなのに、壱の淫蟲を取り込んだ炭治郎の身体はこれを「愉悦」と感じられるようにすり替えて性感神経を刺激してくる。
限界を超える激悦の連続に炭治郎は何度も意識を失いそうになりながらも、その快楽の全てを取り零すことなく感じ切ってしまう。
それは痛みを伴った拷問よりも、炭治郎に取っては辛い物だったかもしれない。蟲に犯された雛先は延々とズキズキした快感が支配し、あまりの気持ちよさに何も考えることができない。
壱の精液を受けた胎内では、性感帯の密集した部分で蟲が活発に動いて肛悦まで追加され、快楽を感じる脳神経が焼き切れそうだ。

「はぁっ！はあっ！はあっ！はあっ・・・！」

無駄なこととわかっていても、必死に快楽を逸らそうと努力する炭治郎を見下ろし、壱は少し浮かない表情をしている。当然、炭治郎はそのことに気づく余裕などない。

「うーん、どうやら蟲の定着がうまくいかなかったようだな。失敗だ。次のヤツで試す」

すると、壱は手を伸ばして炭治郎の雛先を掴むと、鈴口から少し身を出している白い蟲を掴み、そのままゆっくりと引き抜き始めた。

「っっっっ！あ、あぁぁあ――――――――――――！」

あまりの激感に、炭治郎が背中を弓なりに反らせ、顎を仰け反らせて身体を震わせる。射精絶頂を百倍に煮詰めたような凄悦が雛先に走り、炭治郎は身も世もなく身体をのた打ち回らせた。
壱も炭治郎が長く快感を受けられるように、わざと蟲をゆっくりと引き抜いているようだった。尿道の内側をゾリゾリと擦られながらの引き抜きは、筆舌に尽くし難いほどの激悦であり、炭治郎の理性を簡単に奪う強烈な淫悦だった。
しかし蟲も、やがて炭治郎の雛先から身の全てを抜き出し、激悦の時間をようやく終わらせる。

「あっ・・・あぁ・・・あっ・・・は、はっ・・・はっ、はっ・・・・・・」

ようやく強悦から解放された炭治郎は、身体をドサリとベッドに沈め、身体中の毛穴から汗を噴き出させて、赫い瞳は虚空をさ迷い、ただ胸を激しく上下させている。

「こいつは駄目だったな・・・まあ、一匹目はこんなもんか。次はこいつだ」

今度は壱の掌から糸が垂れた。しかしその糸には生命が宿っているらしく、針金のような身体をくねらせている。そして、等間隔に桃色の米粒大の粒が備わっていた。

「うあ・・・も、もうやめ・・・」

「何言ってんだ。まだ一匹目だろうが。ちゃんと定着する蟲が選ばれるまで続けるからな」

そう言って壱がその蟲の先端を、再び炭治郎の雛先の先端に垂らす。すると、糸状の蟲はツプツプと尿道へ侵入し、またもや炭治郎を激悦の波へと飲み込ませた。

「あぁぁあああああ！」

今度の蟲は繊毛が無い代わりに、繊毛よりも感覚が確かな粒が雛先の快感を最高潮に高め、炭治郎に激悦を味わわせてくる。そして今度の蟲は先ほどのものよりも長く、尿道の最奥にまで到達し、精管にまで侵入を果たしてくる。

「っ！あ、あ、あぁぁぁあああああああっ！」

※※※

「苦しくないだろう?気持ちいい、だろう?ほらほら、もっと好くなるから、どんどん体液を吐き出すんだ」

「んっ・・・!あ、あぁぁああっ!」

蟲の粘液でぬるぬるになった壱の手が、極めて鋭敏になった炭治郎の雛先を容赦なく上下に摩擦する。中に蟲がいなければ、一擦りごとに射精絶頂を迎えていそうな強烈な快感に、炭治郎はなす術もなく身体を身悶えさせ、快楽の声を上げるだけだ。
そんな快楽の最中、蟲を挿入された尿道に刺激を感じ、炭治郎は異変に慄きながら、新たな快感に声を震わせる。

「あっ!あっ!あぁっ・・・!はぁ、はぁ、へ・・・変・・・変だ・・・何を・・・」

「ん?そろそろ孵ったか?」

「か、孵っ・・・!」

ゾワリとした言葉を聞いて、炭治郎は寒気を感じた。その最中にも明らかに尿道が押し広げられる感触を知覚し、首を左右に振る。

「お前の中に挿れたのは蟲の卵だよ・・・これから精液の代わりにこっちが吐き出されるようになるが、普通の射精とは比べ物にならねえぐらい気持ちいいぜ？」

自分の身体の一部の中でおぞましい生き物が産み出されると思うと、炭治郎はそのおぞましさに快楽を一瞬忘れるほどだった。
しかし、尿道の中で明らかに無数の何かが蠢き、恐ろしく敏感になってしまっている尿道を刺激して、すぐに炭治郎を快感に浸してゆく。

「ふあ、はぁ嫌だ・・・！んんんんっ！」

ゾクリと息が詰まる快感が雛先を駆け抜けかと思うと、鈴口から一体のごく小さな物体が飛び出した。

「あああああっ！あ・・・あ・・・」

どうやら内部で孵った卵が、早速炭治郎の雛先から吐き出されたらしい。しかしその快感は凄まじく、雛先全体が極甘に痺れ、通常の射精の数倍もの絶頂感が凝縮された、凄まじい快楽だった。

「あっ・・・あ・・・あぁ・・・」

未だに蟲の吐き出しの快感に腰を痺れさせ呻く炭治郎を眺め、壱が口を開く。

「まだ一匹目だ。これからまだまだ孵ってくるぜ・・・？百匹は軽く超えるだろうな」

「なっ・・・そんな・・・！」

一度の吐き出しだけでこれほどの快楽だというのに、それが無限とも思える百回分味わわなければならないなど、炭治郎に取っては甘美な拷問に間違いなかった。
壱は炭治郎が吐き出した蟲を拾い上げ、赫い瞳の眼前に突き付ける。

「ほら、お前が産んだ蟲ちゃんだ。思ったより可愛いだろう？」

それは真っ白な物体で、精子を爪の大きさ程に肥大化させたものだった。生きている証拠に、自らからぶら下がっている短い紐を左右にせわしなく振りたくっている。
炭治郎が想像していたよりもおぞましくないが、こんなものが自分の身体から産み出されたと思うと、やはり戦慄する。
しかし身体は炭治郎の感情を置き去って、次の産卵に移り、雛先の中で快感が膨張してゆく。

「あっ・・・あぁ・・・あああああ――――――――!」

二匹目の蟲が鈴口から吐き出されたが、やはりその快感は総毛立つほど強力で、炭治郎は吐き出した直後、身体を虚脱させた。
はぁはぁと息を乱す炭治郎だったが雛先の疼きは延々と続き、またもや次の蟲が鈴口から飛び出してゆく。

「くあっ！あぁぁぁああ！」

一度の射精の快感を限界まで煮詰めたような激悦が連続で巻き起こり、炭治郎は体中の毛穴から汗を流して身体を快感で震えさせて愉悦に耐える。

「まだまだこんなもんじゃないぜ？ほらほら、お前の体液を吸って、どんどん蟲が孵化してきたみたいだな。次は連続でいくかもな」

絶望的な宣言をされ、炭治郎は逃れられない快楽拷問に身体を震わせるが、身体の方は炭治郎の意思とは関係なく次の快感を待ちわびるように疼き始める。

（いや、いやだ・・・こんな快感、続けられたら戻れなくなる・・・！）

炭治郎の赫い瞳から涙が零れる。壱はそれを見て口の端を上げて微笑み、炭治郎の雛先の表面を指で摩擦して追い打ちをかけた。

「はぐぅぅっ・・・！ああっ！や、やめて、だめ、だめっ・・・！」

炭治郎の頭が真っ白になり、またもや鈴口から新たな蟲が吐き出されてゆく。しかも今度は三連続で産み出され、炭治郎はあまりの激悦に意識を遠ざけた。

「――――――――っ！」

快感は言葉にならず、炭治郎は背中を弓なりに反らせて身体を硬直させ、快感に耐えた。感覚が凄すぎて自分が一体何匹排出したのかもわからない。

「おら気絶するんじゃねえ。まだ五匹しか産んでねえんだ。これからもっと凄くなるんだから、この程度でへばってんじゃねえよ」

ピタピタと壱に頬を軽く叩かれるが、炭治郎の意識は快感に支配されていた。これほどの悦を感じながら、まだ五匹分しか感じていないと言う事実に絶望感が増し、炭治郎は涙を流す。

「た、頼む・・・もう気が狂いそうだ・・・止めてくれ・・・っ」

息も絶え絶えな炭治郎の哀願を見下ろすが、壱は薄ら笑いを浮かべたまま表情を変えない。

「なあに、気は狂わねえよ。だから安心して、気持ちよくなって、快感を楽しめばいいだろう」

「んんっ！いや、嫌だっ！いやっ・・・あぁぁあぁぁあっ！」

※続きは製品版でお楽しみください※